

## 192. 大殿筋の起始と停止の形態

## 【キーワード】

ヒト・大殿筋・筋連結

千船病院

松原 貴子

神戸大学医学部保健学科

講武 芳英

名古屋大学医療技術短期大学部

河上 敬介・辻井洋一郎・兼松 美紀

## 《目的》

大殿筋は起居動作や直立歩行において重要な役割を果たす筋である。また、この筋は腰痛や殿部痛の原因となり、その機能障害は理学療法の治療対象となる。それらの中での検査や治療で用いられる触察などを行うにあたっては、その筋の詳細な構造を知っておく必要がある。本筋は解剖学書によると、腸骨、仙骨、尾骨、仙結節靭帯、胸腰筋膜に起始し、殿筋粗面や腸脛靭帯に停止するとされている。しかし、解剖学書により記載が若干異なり、筋線維の付着形態などの詳細な記述は少ない。そこで、本研究は特に仙骨に起始をもつ筋線維と腸脛靭帯に停止をもつ筋線維の付着形態について調べた。

## 《方法》

対象はヒト10体の大殿筋13筋(男性3体、平均死亡年齢75.3歳、右6筋)を用いた。仙骨に起始をもつ3筋(右1筋)を用い、正中仙骨稜の上から1つ目と2つ目の突起および仙骨管裂孔の各高さで、正中線から外側へ3cm横切断し、反転後の断面にて本筋を観察した。そして、筋線維が存在する部位を見るために、各高さにおいて正中線から筋線維の内側端までの長さを測定した。一方、腸脛靭帯に停止をもつ12筋(右6筋)を用い、筋腹中央を横切断し、停止付近の筋腹を反転して本筋を観察した。

## 《結果》

## 1. 仙骨に起始をもつ筋線維について

大殿筋表層の筋線維は、本筋表面を被覆する胸腰筋膜の裏面から起こっていた。一方、深層の筋線維は正中仙骨稜と外側仙骨稜の間をつなぐ筋膜の表面に起始をもっていた。これらの筋膜は正中仙骨稜を越えて反対側まで伸びており、反対側の

大殿筋の起始にもなっていた。筋線維の最内側端は正中線から、正中仙骨稜の上から1つ目の突起の高さで約25mm、上から2つ目の突起の高さで約10mm、仙骨管裂孔の高さでは約1.5mmであった。なお、仙骨の上1/2では正中仙骨稜と外側仙骨稜の間をつなぐ筋膜の裏面に多裂筋の一部が起始し、多裂筋との間に筋膜を介する筋連結(隣接する筋同士をつながり)があった。しかし、仙骨の下1/2には多裂筋は存在しなかった。これらの結果は調査したすべての筋で同様であった。

## 2. 腸脛靭帯に停止をもつ筋線維について

多くの筋線維は大腿筋膜張筋の延長である腸脛靭帯や、外側広筋や中間広筋を覆う大腿筋膜に停止し、それらの筋群との間に筋連結が存在した。ただ、深層の筋線維が停止する腸脛靭帯の一部は、膜状から紐状に収束していた。それは下腿へ向かう腸脛靭帯とは別に、外側広筋およびそれを覆う大腿筋膜のポケット様開窓部を貫通し、殿筋粗面の約1cm遠位で大腿骨に停止していた。以上のような構造は調査したすべての筋で同様であった。

## 《考察》

仙骨の起始は、日本人体解剖学(南山堂, 1991)に記載されている“仙骨外側縁”というよりむしろGray's anatomy (Churchill Livingstone, 1995)に記載されている“仙骨下部後面”や、Clinical anatomy for medical students (Little Brown and Company, 1995)に記載されている“仙骨後方表面”であり、特に仙骨の遠位ではほぼ正中線まで筋線維が存在していた。このことは、大殿筋の評価や治療の際には正中線の近くまでを触察すべき領域に入れることを意味する。一方、大殿筋の大部分の筋線維が停止する腸脛靭帯の一部が、直接骨に付着していた。このことは大殿筋の張力が直接大腿骨に伝わり、外側広筋などの軟部組織にのみ付着しているよりも効率的な股関節の運動を可能にすると考えられる。また、本筋の筋線維は多裂筋や大腿筋膜張筋、外側広筋、中間広筋、さらに反対側の大殿筋との間で筋連結していた。臨床で、大殿筋のストレッチを行う場合、与えた伸張力が連結している筋群に分散され、十分な伸張が得られない可能性がある。よって、これらの連結する筋群にも同時にストレッチが加わる方法によらなければ十分な効果は期待できない。